
発展学習08-3 阻止の随伴性と「自由とは何か？」

「自由」という概念は、国語辞典では、以下のように定義されています。【一部、長谷川により改変、省略】

・『大辞泉』

1. 自分の意のままに振る舞うことができること。また、そのさま。「一な時間をもつ」「車を一にあやつる」「一の身」
2. 勝手気ままなこと。わがまま。
3. 《freedom》哲学で、消極的には他から強制・拘束・妨害などを受けないことをいい、積極的には自主的、主体的に自己自身の本性に従うことをいう。つまり、「…からの自由」と「…への自由」をさす。

・『新明解』

1. 他から制限や束縛を受けず、自分の意志・感情に従って行動△する（出来る）こと。また、その様子。
2. 民主主義社会において認められている権利の一つ。社会秩序を乱さぬ限り、その人の主体的な意志・判断に基づく言動が認められていること。

しかし、これらの定義では、その前提として、「自分の意」、「自己自身の本性」、あるいは「自分の意志」、や「自分の感情」、「主体的な意志」などの存在が仮定されています。

これに対して、これまで述べてきたように、行動分析学では、自発された行動が直後の結果によって変化（＝強化または弱化する）ことを前提としており、「意志」を前提とする余地は残されていません。

スキナーはいろいろな著作の中で「自由」について語っており、『Beyond Freedom and Dignity』（邦訳「自由と尊厳を超えて」）という本まで刊行しています。昨年、この本の新訳が、山形浩生氏によって春秋社から出版されました（ISBN 9784861103414）。スキナーのもともとの記述が分かりにくいこともあって、この1冊の日本語訳だけでスキナーの考えたうまく伝わるのかどうかは微妙ですが、ネット上では、山形さんの29頁に及ぶ「訳者あとがき」のところが分かりやすい、という感想がちらほら出ています。その289～290頁のところには

本書でスキナーが言いたいのは、自由を奪え、ということではない。自由なんてもともとなかった、ということだ。人は常に周囲からコントロールを受けていて、あらゆる行動はその結果にすぎない。ぼくたちが自由だと思っているものは、実は単に「コントロールを

受けているのにそれを知らない』というだけの話だ... 【中略】... だからだんだんと人と環境との相互作用が解明されてくれば、いままで自由だと思われていた部分はどうしても狭まる。【原文は縦書き。htmlの制約により、ルビを下線に変更】

と分かりやすく解説されており、「自由」に関するスキナーの主張は上記でほぼ言い尽くされていると言ってよいのではないかと思います。但し、「コントロール」というと、どうしても、支配者や周囲の人々から操られているという印象を与えてしまいます。しかし、実際には、無人島に漂着してひとりぼっちで暮らしていても、そこでの生活行動は、自然環境がもたらす結果によって強化されたり弱化されたりしていきます。例えば、昔、NHK「みんなのうた」で放送していた歌の中に「あいつのハンググライダー」という歌がありました。その歌詞の中では、

大空を自由に駆けめぐるのが あいつの ただ一つの夢さ

【中略】

今日もあいつが 空を駆けめぐる
心を縛るものなんか この世にはないから
いつだって飛べるさ いつだって自由さ

【後略】

というように「自由」が歌われていました。確かに、日常社会の束縛に比べると、空を駆け巡っている時はいかにも自由であるように見えます。しかし現実には、ハングライダーが飛べる気象条件は限られていて「いつだって飛べる」わけではありませんし、滑空中も、高度や安定を保つための様々な操作はすべて、結果によってコントロールされています。「ハングライダーで飛ぶ」という枠組みの中での行動はそれぞれ、行動随伴性によって強化・弱化されており、さらに、種々の行動の中からハングライダーという行動機会を選択することもまた、強化されていると言えます。

よく、「予言破り」が議論されることがありますが、そもそも予言破りという行動は、予言の内容を知っていなければできません。その上で、「予言に反する行動をした」という結果が好子になっているだけですから、別段、自由意志の証拠にはなりません。

また、オペラント行動が自発されること自体、弁別刺激や確立操作の影響を受けています。それらの偶然的変動をすべて把握することはできないゆえ、行動の予測は常に確率的なレベルにとどまります。例えば、じゃんけんの最中、相手が次にグー、チョキ、パーのいずれを出すかということは、1/3より大きめの確率で予測できますが、100%の予測は不可能でしょう。しかしこれは、別段、自由意志で次の手を決定しているという証拠にはなりません。直前の勝ち負け、相手のしぐさ、ちょっと吹いた風、ちょっとした音などによって、変動しているだけのことです。私自身も手がけたこともあります。人間以外の動物でも、かなりの勝率で「じゃんけん」型のゲームに勝つことができます。その際、説

明概念としての「自由意志」は不要です*1。

しかしそうは言っても、自由の対義語としての、被支配や束縛は明らかに存在します。人類の歴史はまた、少数の特権階級の抑圧・支配を打破し自由を勝ち取る歴史であったと言っても過言ではありません。

こうした「被支配や束縛からの自由」は「ネガティブな自由(negative liberty)」と呼ばれています。要するに、行動が「嫌子消失の随伴性」、「好子消失阻止の随伴性」、「嫌子出現阻止の随伴性」のいずれかによって強化されている時は、人々は、束縛や義務感を感じます。それらを打破することは、「〇〇からの自由(freedom from ~)」の獲得を意味しています。

いっぽう、これとは別に、「ポジティブな自由(positive liberty)」すなわち、「〇〇する自由(freedom to ~, 〇〇してもよいという自由)」が指摘されています。これは主として、好子出現の随伴性によって強化されている状態のことです。前回も述べたように、この状態のもとでの行動は、好子出現無しには強化されません。しかし、差し迫って追い詰められているわけではありませんから、人々は、「したいから行動している」と感じます。本当は強化されているから行動しているのですが、そのことには必ずしも気づきません。また、行動の直後に好子が出現しなくなると、その行動を止めてしまいます(=消去)、人々は、それを「つまらなくなったから止めた」、「飽きた」というように感じます。本当は、行動が消去されたから起こりにくくなったのですが、自分の意志で行動を止めたように錯覚します。ですので、行動が好子出現の随伴性だけで強化されている人がいたら、その人は、完全に自由人であると思っっているはずで。上掲の『Beyond Freedom and Dignity』、あるいは慶應義塾大学での講演「The Non-Punitive Society (罰無き社会)」*2でスキナーが言いたかったことは、いまなお人為的に設定されている「好子消失阻止の随伴性」などの束縛をできるだけ無くし、「ポジティブな自由(positive liberty)」のもとで、好子出現の随伴性だけで構成されるような社会をみざすということにつながります。スキナーは、ホンモノの自由の創造をみざしていたといってもよいのではないかと思います。

もっとも、私個人としては、好子出現の随伴性だけで構成されるような「完全な」自由

*1 少し古いですが、参考文献が以下にあります。

長谷川(1991). 人の心を読む: 選択行動における予測問題. 岡山大学文学部紀要, 16, 53-62.
<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/ja/journal/jfl/16/--/article/53806>

長谷川(1992). 3項選択行動の柔軟性に及ぼす教示内容と記憶負荷の効果. 岡山大学文学部紀要, 17, 99-109.

<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/ja/journal/jfl/17/--/article/53807>

*2

以下で無料閲覧可能。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjba/5/2/5_KJ00001021402/_article/-char/ja

社会の構築には否定的です。その理由として、以下を挙げることができます。

- すでに述べたように、ずっと先になって実現するような大きな目標（大きな好子）を達成するためには、さまざまな手段的行動、例えば、大学合格という目標を達成するための受験勉強、を遂行せざるを得ません。受験勉強が楽しくてたまらないという人を除けば、それらの行動は、好子消失（＝不合格）阻止の随伴性によって義務的に強化されるという宿命を持っています。「行動するのが良いが、行動しなくても安泰」というような好子出現の随伴性だけで行動を遂行しようとしても、手段的行動はしばしば先延ばし（procrastinate）されてしまいます。
- 「ポジティブな自由(positive liberty)」のもとで自由に選べる選択肢があふれかえると、人々は逆に、それらに戸惑い、選択の妥当性について後悔するようになります（＝「選択のパラドックス」）*3。
- 社会の中で生きていく限りにおいては、人々は、他者にサービスを提供し、その一方で、他者からのサービスを受けて生活していきます。小さなムラ社会であれば、相互のサービスは互助互酬によって成り立ちますが、お金が無ければ成り立たないという社会の場合には、必ず、好子消失阻止の随伴性が必要です。なぜなら、お金は、いっけん、般性習得性好子であるように見えて、本質は、「他者を働かせるツール」であるためです*4。

*3 この問題については、第3章の発展学習、

選択の技法と決断

をご覧ください。

*4 このことについては第8章の発展学習、

阻止の随伴性と「お金とは何か？」

で後述します。